

大宋宣和遺事にみえる白話語彙

寺 村 政 男

はじめに

講史に屬する白話小説の中で、宋末から元にかけて成立したと目されるものは3種存在する、「新編五代史平話」、「全相平話五種」及び「大宋宣和遺事」である。「大宋宣和遺事」は、靖康の難前後の徽宗、欽宗の二帝の治政間の歴史を取りあつかったものであるが、「水滸傳」の粉本となった、宋江等の逸事を以って有名な書物である。恐らく「新編五代史平話」などと同じく南宋の頃に、講史の説話人達のテキストとなっていたものをまとめたものであろう（竊憤録などを下敷にしていることは早く指摘されている）。魯迅の「小説史略」⁽¹⁾によれば宋代のものを、元人の手により増補したものとする。又香坂順一氏によると、詩詞の押韻上、入聲がそのまま保たれている所より、⁽²⁾元人の手が加わっているとはいえず、北方人の手によるものではないとする。⁽³⁾全體的には他の講史類と同じく文言傾斜の強い作品であるが、徽宗と李師師の物語や、宋江等の逸事を記した「亨集」、士禮居叢書本では「前集」の後半部は、白話傾斜がやや強くなっている。當時の説話人の口調を、そのまま寫したのかも知れない。版本は2種に大別でき、士禮居叢書本（前集と後集に分け、回目が付されている、説庫所收のものがこれにあたる）と新刊大宋宣和遺事全四冊（金陵王氏洛川校正重

刊、元、亨、利、貞の四集に分ける。一九二五年商務印書館より、標點宋人平話の一として出版されている。郎瑛の「七修類稿」の記事や「百川書志」⁽⁴⁾の記事より推測して、前集、後集に分けたものの方が古い形であろう。この2種の版本間には、大きくはないけれども字句に多少の異同がある。小稿では紙数の都合上校勘を付する事が出来なかつた。近く早實「研究紀要」第17號に「宋元白話語彙滙釋Ⅲ」大宋宣和遺事編をのせる豫定である。こちらの方も参考にしてほしい。白話語彙の順序はほぼローマ字發音記號のアルファベットの順によつた。底本は民國十四年、商務印書館刊行の「大宋宣和遺事」によつた。

1 巴謾、2 簸弄、3 此間、4 くの底、5 動輒・動不動、6 篤磨、7 果足、8 價、9 克日、10 苦苦、11 來日、12 麼、13 末梢頭、14 愆、15 些個、16 先生、17 也無、18 一壁廂、19 一發、20 越越的、21 則箇、22 支分・支吾、23 逐日。

1、巴謾

例、姓李名做師師、一片心只待求食巴謾。(亨集)

巴謾はもともと宋、元間に流行した賭け事の一つで錢の兩面を「字」と「幕」に分けて勝負をあらそう。そこから轉じて、不當に錢をかたりとる事を指すようになる。巴謾は巴鋌とも書かれ元雜劇の中に用例がみえる。

「風月紫雲庭」 1折

他生時節、決定犯著甚愛錢巴、鐔的星。

「烟花夢」

巴、鐔的心腸、實是歹。

2、簸弄

例1、天下不安、皆由京、卞二人簸弄。(京、卞は蔡京、蔡卞をさす) (元集)

例2、徽宗悉聽諸奸簸弄。(亨集)

簸弄は撥弄、擺弄とも書かれる。

「兒女英雄傳」 33回

豈不是依然由着那班莊頭撥弄。

「金瓶梅詞話」 32回

又沒什麼隨他擺弄、一回子就易了。

また簸のみで簸弄と同じ意味を表わす場合もある。

「儒林外史」 4回

不過要簸掉我幾兩銀子、好把屋後那一塊田賣與他。

意味は相手を愚弄したり、不正な手段を弄したりすることを指す。「水滸傳」には擺撥という言葉がみえるが同じ意味を指すようだ。

「水滸全傳」102回

原來童貫密使人分付了府尹、正要尋罪過擺撥他。

もつとも擺撥は古く「世説新語」政事、にみえる。

王謂何曰、我今故與林公來相看、望擺撥常務。

3、此間

例、阿計替勉帝可就此間埋藏。(貞集)

此地にあたるこの語は、場所をあらわす近稱として廣くもちいられている。古くは變文類、「遊仙窟」等にもその例をみる。

「漢將王陵變」

緣甚事得到此間。

「遊仙窟」

此間疎陋、未免風塵。

ただ遊仙窟には次の様な例がある。

彼誠既有來意、此間何能不答。

この此間には、時間をあらわす近稱としての意味が含まれている。「宣和遺事」と同時代的資料では、ほとんどが場所をあらわす場合が多い。

「新編五代史平話」

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

可擇日便離此間、沿途殺掠回去、不旬日間便到故郷。

「簡貼和尚」

這大相國寺裏知寺廝認、留苦行在此間、打化香油錢。

4、ゝ的・ゝ底

底とのの間には、それぞれ端母でありながら、入聲と上聲の聲調區別があり、宋代においてゝ底という表記が、入聲韻の缺落により上聲に變化し、ゝ的という表記が生れたという。「宣和遺事」におけるこの表記をみてみると版本によって多少の異同がみられるので注意を要する。今、士禮居叢書本系を士、新刊大宋宣和遺事系を新と簡稱して示す。

士、陽明用事底、時節(中略)陰濁用事底、時節。(元集)

新、陽明用事的、時節(中略)陰濁用事底、時節。(前集)

そこで兩本に共通する、異同のない部分のみに限ってみると、やはり、底とのの混用がみられる。

例1、那三十六人道簡甚底。(亨集)

例2、那東帖說簡甚的。(元集)

量的にはもちろんゝ的が壓倒的に多い。

又本來、ゝ地と表記されるべきものがゝ的と表記されるのも元代になってからという。⁽⁵⁾「宣和遺事」にもこの例がみられる。

例、天子帶酒、觀師師之貌、越越的風韻。俄不覺的天色漸晚。(亨集)

動詞のあとにつき補語をとめない本来「得」と表記されるべき場合に的がつかわれている例もみえる。

例、俄有一大臣出班奏帝、説的羣臣失色。(亨集)

もちろん得を用いた例もみえる。

例、帶領得、吳加亮、劉唐、秦明……。 (元集)

ところで「新編五代史平話」には底の表記はみあたらず、すべてので表記されている。それならば創作時期は、元代とすべきであるが、原本が不明で排印本に依った場合、排印されるさいに改められた可能性があるのでにわかに創作時代をこれによって決める事はむずかしい。

5、動輒・動不動

例1、動輒、殺害、刑及無辜。(利集)

例2、動輒、以彼強我弱爲辭。(貞集)

ややもすれば「と」という状態になる、という意味をもつ、動に文言の同義語「輒」が付いたものである。「宣和遺事」には同義をもつ動不動の用例もみられる。

例、他動、不動、金爪辭腦。(亨集)

又動のみの使用例もみえる。

例、動、獲數千萬貫。(元集)

6、篤磨

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

例、又沒支分、猶然遞滯、打篤磨、槎來根底。(亨集)

篤磨は元曲中によくみられる言葉で、獨磨、突磨などとも書かれて、ぐるぐるまわる、めぐるという意味から又落つかぬさまをあらわす場合にも使われる。前者の例は「劉知遠諸宮調」に、後者の使は「董西廂」にもみられる。

「劉知遠諸宮調」

一箇喚彥威、一箇史洪肇、着兩條擔打得來篤磨。

「董西廂」

去了紅娘、會聖肯書幃裏坐、坐不定一地裏篤磨。

7、果足

例、那楊志爲等孫立不來、又值雪天、旅途貧困、缺少果足。(元集)

盤纏、盤費などと同じく、路銀をさす言葉で「新編五代史平話」にもみえる。

「新編五代史平話」

例1、又沒果足、怎生去得。

例2、恐怕你闕少果足。

「劉知遠諸宮調」の用例でみると旅の荷物をさす場合もある。知遠見説、人急計生、收拾些果足。

8、く價

例、終日價、無人商量。(元集)

副詞語尾で家、假とも書かれる。用法は現代語の「地」に似ている。古くは、唐人傳奇の「李娃傳」に次のような文がある。

由是凶肆日假令之執總帷、獲其直以自給。

宋代の詞にはよくみえる語で、「董西廂」やとりわけ「新編五代史平話」には、多くの例がみられる。

「董西廂」

例 1、毎日價、疎敬不曾着家。

例 2、巾袖與枕頭兒都是淚痕、一夜家無眠白日盹。

例 3、鎮日家耽酒迷花。

「新編五代史平話」

例 1、則見一陣價起的是秋風。

例 2、諸將一力價勸進。

また五代史平話には「地價」という例もみえる。

那李克用正在醉中、鼻鼾鉤鉤地價睡。

9、克日

例、克日併力攻撃、有必勝之道。(利集)

現代語の馬上、ないし立刻の意味にあたる克日は、刻日とも書かれ「水滸傳」にも散見する。

「水滸全傳」54回

克日、掃清山寨、班師還朝。

同76回

刻日、要掃清山寨、擒拿衆賊、以安兆民。

少し新しい所では、「英烈傳」や、「兒女英雄傳」にもみえる。

「英烈傳」41回

亮祖刻日、領兵、望洲進發。

「兒女英雄傳」2回

便不肯刻日、到工查收。

10、苦苦

例、高俅見婆子、苦苦告説、遂放了賈突。(享集)

副詞で、しきりにくするという意味をもつ。「水滸傳」や「清平山堂話本」などにも散見するが、「劉知遠諸宮調」に次のような例がみえる。

「劉知遠諸宮調」

傍裏三娘、心中作念。苦苦告神天少助力。

内田道夫氏の「校注劉知遠諸宮調」によれば「ねんごろに」と注している。「苦」一語では落ち着きが少ないので重ねられて「苦苦」の語が出てきたのであろう。

「永樂大典戲文」(張協狀元)

爹娘見兒苦、苦要去、不免與他數兩金銀、以作盤費。

「水滸全傳」53回

戴宗又苦、苦告公孫勝道。

「清平山堂話本」(楊溫攔路虎傳)

員外道、你苦、苦要玄時、隨你去也不妨。

尚、「水滸傳」には、地をともなつた例もみえる。

「水滸全傳」20回

苦、苦地、請劉唐坐了第五位、阮小二坐了第六位。

11、來日

例1、元帥今遣汝等赴燕京朝皇帝、來日、起行。(利集)

例2、來日、教陛下入京城安撫上皇。(利集)

現代語の明天にあたる言葉で、唐代の詞や變文等にも見られる言葉である。「宣和遺事」では明天にあたる言葉は、詞の中に明日が一箇所、あとはすべて來日であらわされている。

「韓擒虎話本變」

阿奴來日、前朝自幾(己)宣問。

又、明天早上の意味をもつ來早の語もみえる。

例、得旨、又移我幾個往五國城、來早、起行。(貞集)

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

明朝の用例はないが今朝の語はみえる。

例、厲聲高喝師師道、從前可惜與你供炭米、今朝却與別人歡。(亨集)

12、ㄣ摩

例1、那八個大漢、你認得姓名麼。(元集)

例2、預先說着箇宣和、靖康年間識語麼。(元集)

例3、官人你坐麼、我說與你、休心困者。(亨集)

句末につく、ㄣ末、ㄣ不、ㄣ否、ㄣ無、などをともなつて疑問を表していたものが、唐代にあらわれるㄣ無の音韻變化により、ㄣ摩、ㄣ磨と表記されるようになった。「宣和遺事」では、文言系の、乎、哉などととも、ㄣ摩がよくもちいられている。

又例2にみられるように、疑問文を構成するだけではなく、斷定の語氣助詞に近い働き、つまり現代語における嘛に近い用例もみられる。

さらに例3の用例では、勧誘ないし軽い命令の語氣をあらわす、現代語の吧に近い働きをしている。

13、末梢頭

例、末梢頭、賢人在位、小人在野。(元集)

結局、あるいはつまりなどの意味をもつ語であるがあまりみかけない。『噓世明言』36卷「宋四公大鬧禁魂張」に末梢の用例がある。

例、書上寫着許多言語、未梢道、可勦除此人。

「新編五代史平話」や元曲、「董西廂」にみられる下梢などと同じ意味であろう。

「新編五代史平話」

例、您、下梢、只恁地狼狽。

14、您

例1、您、小官、何得僭言朝廷大事。(亨集)

例2、適有四騎來追、問有康王由此過否、吾已結之曰、已過兩日矣。您、追逐不及也。(貞集)

您、ないし你們が縮まって出てきたのが您であるといわれる。したがって您是當然複數なのであるが、宋代よりその單數としての用例がみられる。「新編五代史平話」にも您在單複兩用されている例がみられる。

例1、將朱溫四人喝住、問道、您是誰人。

例2、晉王上驛樓責張彥道、您恃凶悖陵虐主帥殘暴百姓。

ちなみに、「宣和遺事」にみられる人稱代名詞をみると、第一人稱代名詞は、「我」、「咱」、「俺」、第二人稱では、「你」、「您」、第三人稱では、「他」、「伊」などがみられる。(吾、汝、朕などの文言系のものは除く)俺は我們、我憑の合音、咱は自家の合音であるとされる、したがって本來的には「俺」、「咱」は複數であるが、「宣和遺事」では、「俺」の單數形及び「咱們」の用例もみられる。

例1、宋江看了姓名見梁山濼上見有二十四人、和俺、共二十五人了。(亨集)

例2、你可急忙告報官司去、恐帶累咱們。(亨集)

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

又複數形の語尾助辭についてみると、「們」と「每」の混用がみられる。

例1、你可急忙告報官司去、恐帶累咱們。(亨集)

例2、相國擔驚、不干小人每。(亨集)

このような混用は、「金瓶梅詞話」や「水滸傳」にもみられる。

15、些個

例1、買了兩瓶、令一行人都吃些箇。(元集)

例2、就買些箇酒去燒香。(元集)

現代語の一點兒にあたる言葉で「劉知遠諸宮調」、「清平山堂話本」や「金瓶梅詞話」にもみえる。

「劉知遠諸宮調」

例、你咱實話沒些箇。

「簡貼和尚」

例、這厮偷了本師二百兩銀器、不見了、吃了些箇情拷。

「金瓶梅詞話」5回

例、武大道如何、鄆哥道還早些箇。

「水滸傳」にみられる些兒の用例はみられないし又、些些、些子の用例もあらわれない。

16、先生

例1、徐知常始賜號沖虛先生。(元集)

例2、置道階品秩、凡二十六等、先生處士封號。(元集)

蔡美彪の「元代白話碑集錄」をみると、先生の語が多くみられる。

「一二三八年鳳翔長春觀公據碑」

這聖旨文字裏、和尚根底寺、也立喬大師根底胡本刺、先生根底觀院。

蔡氏は次のように註している。

「元人用來專指道士。但如本書所收成吉思汗時代之聖旨則稱道人、不稱先生、此種用法、當自窩闊臺以後、始漸通行」

宋元期において、道士をさして先生とっていたらしい。「水滸傳」では、吳用をさして先生と呼ばせているし、又54回では、公孫勝の師、羅真人をさして先生とよんでいる。

『警世通言』28卷「白娘子永鎮雷峯塔」にも次のような例をみる。

那先生道、貧道是終南山道士、到處雲遊。

とうぜん、明代に入っても道士をさして先生と稱していたのであろう。

17、也無

例1、不知其人還靈州也無。(利集)

例2、陛下還有父兄也無。(貞集)

文末に無、否、などを置いて、現代語の「麼にあたる働きをあらわすことは「麼」の項ですでに述べた。無が也を

ともなう也無は、現代語では沒有にあたる働きに近い。「明清文學言語研究會會報」8號に香坂順一氏の詳細な考證が載る。

古くは、變文、宋代では「祖堂集」にその例をみる。

「漢將王陵變」

奉霸王巡營、既是巡營、有號也無。

「祖堂集」卷4

這箇是某甲兄、欲投師出家、還得也無。

18、一壁廂

例、兄見酒桶撇在那一壁廂。(元集)

現代語の一面にあたる一壁廂は、「朴通事諺解」によくみられる。

例1、一壁廂熬些細茶。

例2、一壁廂去浪蕩不的。

少し時代が下って明末の「金瓶梅詞話」や「水滸傳」にもみられる。

「金瓶梅詞話」57回

並不噴道作難一壁廂進報西門慶。

「水滸全傳」43回

一壁廂叫安排酒食管待、不在話下。

また「水滸傳」や「三言」には一壁廂と同様の意味をもつ一壁の語もみえる。

「水滸全傳」72回

一壁、便叫取酒食來。

『古今小説』35卷「簡帖僧巧騙皇甫妻」

見當直王吉在門前一壁、脫下草鞋洗脚。

19、一發

例、武士一發向前。(亨集)

現代語の一起、一块兒にあたる言葉で、他に一處の語がみえる。

例、楊戩、高俅別一處眼睡。(亨集)

一發は、徐夢莘の「三朝北盟會編」や「董西廂」、「朴通事諺解」などにもみえる。

「三朝北盟會編」

例、一發叫呼、奔馬前來、矢下如雨。

「董西廂」

例、主僕行李一發離門走。

「朴通事諺解」

例、懶小厮一發滿槽子饋草。

20、越越的

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

例、天子帶酒觀師師之貌、越越的風韻。(亨集)

現代語の越來越にあたる言葉で元曲や「董西廂」にもみえ、魃魃地とも書かれる。

「董西廂」

例1、君瑞聞言越越地笑。

例2、倚定箇枕頭兒越越地哭。

例3、背畫燭魃魃地哭。

凌景埏の注では暗暗地としているが、これはまちがいであろう。朱居易の「元劇俗語方言例釋」も悄悄地としているがこれもあたらない。

21、則箇

例1、須索玄燒香賽還心願則箇。(亨集)

例2、待朕與諸臣消愁解悶則箇。(亨集)

現代語の才好にあたる則箇は、語尾助詞「則」の入聲韻が消滅して、その缺落をおぎなうために「箇」が着き、則箇の形が生れたという(子箇とも表される)。呂叔湘によれば、著ないし者より出たものとする。蔣禮鴻の「敦煌變文字義通釋」には、變文及び劉長卿の詩等の用例をあげていることより古くは中唐期頃までさかのぼる事ができよう。

「宣和遺事」には則箇と平行して者の用例もみえる。

我説與你、休心困者。(亨集)

このような例は香坂順一氏の「近世語ノート」7(明清文學言語研究會會報第12號)によると、「董西廂」にもみられ

るといふ。「董西廂」には又、則箇と同様の意味をもつ咱の用例もみられる。⁽⁶⁾

22、支分・支吾

例、又没支分、猶然遞滯、打篤磨榉來根底。(亨集)

この支分という語は、物事に對處する等という意味に使われるが、古くは任二北著、「敦煌曲校録」614
何如少健自支分、莫教直到年衰邁。

や變文の「大目乾冥間救母變文并圖一卷」にも

遂即支分財寶、令母在後設齋供。

などの用例がみられる。又「三言」中のいささか古い時期のものを集めたとみられる『古今小説』の中にも次のような例をみる。

『古今小説』4卷「閒雲菴阮三償冤債」

尼姑支分完了、來陪夫人小姐前後行走。

又「宣和遺事」には支分と同じ意味をもつ支吾の語も用いられている。

例、大王宜會諸路將士、竭力支吾。(利集)

支吾は、宋末、元代にはかなりポピュラーな言葉で、「董西廂」や「新編五代史平話」などにもその例をみる。

「董西廂」

恰纔據俺對面不敢支吾。

「新編五代史平話」

哀老力憊、殆不能支吾、僅得走入晉陽、救死且不贖矣。

大宋宣和遺事にみえる白話語彙(寺村)

23、逐日

例、其護衛三百人、逐日、旋伐材本。(利集)

現代語の每天にあたる言葉で、「元白話碑文」、「永樂大典戲文」や「水滸傳」などにもみえる。

「一二三三年盤屋重陽萬壽宮聖旨碑」

例、係逐日、念誦經文告天底人每。

「小孫屠」

例、暖風逐日、好天氣。

「水滸全傳」42回

例、逐日、宴樂、一向不曾還鄉。

「宣和遺事」には、「西遊記」や「金瓶梅詞話」にみられるような、日逐の語はみられない。

〔注〕

(1) 大宋宣和遺事世多以爲宋人作、而文中有呂省元宣和講篇及南儒詠史詩、省元南儒皆元代語、則其書或出於元人。抑宋人舊本、而元時又有增益。

(2) 一例を示すと亭集にみえる次の詩

擘眉鸞髻垂雲碧、眼入明眸秋水溢

鳳鞋半折小弓弓、鶯語一藝嬌滴滴

裁雲剪霧製衫穿、束素織腰恰一搦

桃花爲臉玉爲肌、費盡丹青描不得

(3) 中國語學新辭典、281頁

(4) 七修類稿、「錄(竊憤錄)則竊遺事之下集」

百川書志、「宣和遺事二卷、載徽欽二帝北狩二百七十餘事」なお、錢曾の也是園書目には四卷と記す。

(5) 太田辰夫著「中國歷史文法」353頁

(6) 拙稿「宋元白話語彙滙釋」董西廂編(早實研究紀要第14號1979年)